

天使の衣装を纏まとったプロ



○奥田 幸

笠井 信輔
「アナウンサー」

「コロナ」と書いて「コドク」と読む。

私が血液がんの悪性リンパ腫と診断されたのは2019年12月。新型コロナウイルスが日本に上陸する直前でした。ステージ4、遺伝子異常があり脳に転移しやすく、予後の悪いがん。局アナからフリーアナに転身してわずか2カ月での宣告に、絶望とともに死を覚悟しました。それから4カ月半の長期入院。当初は大勢の友人、知人が見舞いに来てくれました。しかし、残りの3カ月半はコロナのまん延により家族ですらほとんど見舞いに来られません。厳しい抗がん剤治療の中で、孤独の苦痛は大変なものでした。

その孤独を救ったのが24時間、私を看守ってくださった22人の看護師さんたちです。優しさで、孤独を癒す。「白衣の天使」などと昔から言われてきましたが、まさにそのとおり。

しかし、私の病院の看護師さんたちは“天使以上の存在”だったのです。それは驚きにも似た感動。一言で言うならば、天使の衣装を纏ったプロフェッショナルでした。1日24時間に及ぶ、抗がん剤の5日間連続投与が6クール行われる中で、さまざまな副作用に苦しみましたが、どの看護師さんも副作用の症状に大変詳しく、的確な処置をしてくださいました。

眠れず、痛みやムカつきで苦しむ夜には、「温かいタオルをおなかに当ててください」「少し腰をもんでみましょう」「それなら、この薬を持ってきますね」

最初はなぜ看護師さんが薬を処方できるのか不思議でしたが、医師があらかじめ処方してくれた薬から選んでくださっていることがわかりました。それが素晴らしいチョイス！

こうした処置でどれだけの夜を乗り越える